

「書跡デジタル・アーカイブス化」成果先行公開シンポジウム【要旨】

—大東文化大学書道学科と國立台灣藝術大學書畫藝術學系—

○高橋 ただいまから、大東文化大学研究ブランディング事業における「書跡デジタル・アーカイブス化」成果先行公開シンポジウムを開催したいと思います。

○内藤 皆様こんにちは。大東文化大学学長の内藤でございます。

新型コロナウイルス感染症がいまだ収束しない中、また、皆様お忙しいところ、本日はこのシンポジウムにご参加いただき、厚く御礼申し上げます。

東京では緊急事態宣言が発令されており、大学運営も様々な困難に直面しておりますが、その中でこのようなシンポジウムが開催できたことを、心よりうれしく存じます。

ご存じのとおり、大東文化大学と國立台灣藝術大學は、2002年に短期研修覚書を交わし、そして2004年には学術交流協定書及び覚書を締結しております。以来、両大学は、書道を中心とした教育研究学術的交流を展開し、研究者及び交換留学生を含む留学生間の交流、友好関係を深めてまいりました。

平素よりこうした活動にご尽力いただいている皆様方に、この場をかりて心から感謝申し上げます。

さて、大東文化大学は、2018年頃から、建学以来継承されてきた、漢学、そして、書道に関する知的資源を基盤とするデジタル・アーカイブスの整備・構築を進めてまいりました。

この事業は、国の補助金事業でもある「私立大学研究ブランディング事業」にも採択されました。また、2023年に100周年を迎える本学の周年事業の一環としても位置づけております。

本日は、書跡に関するデジタル・アーカイブスを先行公開し、20年来の協定校である國立台灣藝術大學の先生方と研究成果を共有することにより、教育にも還元し、互いの大学の発展につながることを大いに期待しております。

コロナ禍でオンラインでの実施とせざるを得ませんが、皆様にとって有意義なシンポジウムとなることを祈念しております。

本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

○高橋 内藤学長の挨拶をいただきました。

続きまして、共催者であります國立台灣藝術大學、陳志誠校長先生からご挨拶をいただきたいと思います。

○陳志誠 司会者の高橋主任、尊敬する大東文化大学の内藤学長、そして國立台灣藝術大学の長年の友人である河内先生、ならびに本日の国際シンポジウムにご参加いただいた専門家の先生方、私は國立台灣藝術大学校長の陳志成と申します。

本日ご発表の林進忠栄誉教授は書画芸術学系の書道分野において非常に大きな貢献をなされた先生です。そして同じく新鋭教員である蔡介騰先生、さらに特別に招聘しております李郁周客座教授もこの分野の専門家です。

ならびに書画芸術学系の李宗仁主任、本日お集まりの先生方、そして大学院生の精銳は、台湾書道における非常に重要な実践芸術家であります。いま申し上げたすべての書画芸術学系の先生方に、厚く感謝いたします。というのも彼らは本学の書画芸術学系を台湾国内の最高峰へと導いた傑出した人物だからです。

書道に関しては、林進忠教授の古文字研究や蔡介騰先生の「墨遊」（※展覧会名）があり、書の分野において極めて多様に発展しております。

本学の書画芸術学系は河内先生の先進的な支援のもと、日本で最高峰の大東文化大学と広く深い国際交流を積み重ねてまいりました。これからは科学技術を活用して、書道をより適切に継承するのみならず、さらに応用することにより機能面できわめて大きな役割を果たすことになると信じております。

本日、大東文化大学と本学の遠隔シンポジウムにご出席くださいました専門家のみなさま方に衷心より感謝申し上げます。

○高橋 ありがとうございました。陳校長にご挨拶いただきました。

このシンポジウムは、このようにリモート開催ですので、お互にこのまま座って進めたいきたいと思います。

また、今回の通訳を務めてくださるのは、日本側が大東文化大学大学院の陳堯佐さん、台湾側が國立台灣藝術大學の船田聖也さんです。お2人とも、よろしくお願ひします。

それでは、まず初めに、今回の大東文化大学デジタル・アーカイブス化について、河内利治教授から主旨説明をお願いいたします。河内先生は、この研究プランディングチームのリ

ーダーを務めていらっしゃいます。

○河内 先ほど学長からお話をましたが、「平成30年度私立大学研究ブランディング事業」に採択された、本学の研究ブランディング事業「漢学・書道の学際的研究拠点の形成による『東洋人の“道”』研究教育の推進」が、3年目を迎えております。

2020年度、本年の本学の研究ブランディング事業は、コロナウイルス感染予防対策を講じながら、学園「全体事業ブランディングチーム」と、大学「個別研究プロジェクトチーム」8チームが、2年間の事業成果・研究成果を継続して遂行しております。

このうち、学園のチームは「アジア圏における書道を通じた国際交流事業の実施」を計画しております。大学のうち書道学科「書跡のデジタル・アーカイブス化」チームは「大東文化書道デジタル・アーカイブス（仮称）」の一部先行公開を計画していることから、このたび、國立台灣藝術大學書畫藝術系とオンラインによるシンポジウムを通じて、両計画を合同で実施することになりました。

本シンポジウム開催の目的は、「大東文化学が所有する東洋の知的資源をデジタル化し、アーカイブスの運用を開始する」ことを目標に掲げる書道学科「書跡のデジタル・アーカイブス化」チームの研究成果の一部を、國立台灣藝術大學書畫藝術學系に先行公開することより、大東文化学所有の書跡の「知的資源」を国際的に周知し、大東書道のブランド力をさらに高めることにあります。

加えて、本学を始め国内外研究者の活用を促進すること、さらに、國立台灣藝術大學を含む海外の研究教育機関、例えば、中国美術学院などとも連携して、デジタル・アーカイブスを基盤とする〈中国学〉〈書道学〉のイノベーション研究拠点を形成することにあります。

本学園（研究推進室）は、書道学科・図書館・書道研究所所蔵の基調書跡デジタル・アーカイブス事業を所管しており、一部を除いて、写真撮影とそのデジタル化が終了しています。

本シンポジウムでは、この中から、書道学科72件と書道研究所110件のデジタル化リストを台湾側に提示することによって、書跡研究（学術面）と書道教育（芸術面）の2つの側面から意見交換をしていきます。

意見交換のテーマは次のとおりです。

書跡研究（学術面）：日本・中国の古典に書跡に見る歴史的価値について。

書道教育（芸術面）：日本の現代作家の作品に見る創造的価値について、芸術的価値について。

これに加えて、大学という高等教育研究機関が果たす「書跡のデジタル・アーカイブス化の役割」について、最後に意見交換をしていきます。

これが本学のデジタル・アーカイブスサイトでございます。本日はこの中から、書跡、書道学科の170件、その資料を用いて進めさせていただきます。

以上により、この後、次第に沿って進めさせていただきます。

○高橋 Session 1、安達直哉大東文化大学大学院文学研究科委員長から、「大東文化大学所蔵の日本・中国の古典書跡に見る歴史的価値について」、お話しいただきたいと思います。

○安達 我々は、図書館の貴重書、書道学科の貴重書、それから、書道研究所の中の現代作家の作品を取り扱っています。

図書館の貴重書に関してですが、その中の日本書跡、時代的には、日本の平安時代から昭和の時代までがそろっております。1点だけ、一番古いものだけご紹介できればと思います。

昭和切というものです。作者は藤原俊成といいますが、平安時代終わりから鎌倉時代初めにかけて活躍した人であります。その人の晩年の書になります。

もともとは『古今集』、日本では有名な歌集になりますが、その『古今集』の巻1から10まで、それが1冊になっていたものなのですが、それがばらばらにされて、今ご覧いただいているのは、巻の第5の秋の歌の部分になります。

昭和3年、西暦でいいますと1928年にはばらばらにされた、分割されたということで、それにちなんで昭和切というふうに言われているわけです。

藤原俊成という人は、この時代には珍しく、90歳まで生きたという大変長寿の方だったわけですが、ご覧いただければ、起筆の鋭いところとか、あるいは、激しい転折だとか、非常に特徴のある書風を示しているかというふうに思います。

先ほど申し上げましたが、昭和3年、1928年にはばらばらにされたということでありまして、いろんなところに所蔵されているわけですが、それらと併せて研究することができ、貴重だと思います。

それでは、書道学科の書跡の内容について簡単にご紹介させていただきます。

日本書跡のほうですが、時代的にいいますと、室町時代、15世紀から昭和の時代までのものがそろっているということになります。内容的にもいろんなジャンルのものがあるので、最初は和歌懐紙、例えば、このような、室町時代の天皇であります後土御門天皇、その人の直筆である和歌三首懐紙というものがあります。

それから、江戸時代の書ですね。江戸時代前半期の書家として有名な、いわゆる寛永の三筆の一人という人物であります、近衛信尹という人の手紙です。

それから、幕末の貫名海屋、明治時代の日下部鳴鶴、中林梧竹、絵と書がコラボしているような作品、三十六歌仙帖であります。

中国書跡に関しても、清時代以降のもの、楊峴、楊守敬もあります。散氏盤銘の拓本、多胡碑の拓本とか、何点か代表的なものはそろえています。

それ以外に、篆刻家の印譜、甲骨片が10片、硯、漢の銅鏡がそろっています。

全体的な特徴としては、書道史などの授業で活用できるように、バランスよく収集しているかと思います。そういう意味では、非常に教育的な価値は高いのではないかというふうに考えます。

今日は1点だけ、授業に関連して非常に活用されたという例を挙げたいと思います。それは、修理の教材として活用された例があるということです。先ほどお話した後土御門天皇和歌三首懐紙についてお話をさせていただきます。明応4年、1495年、和歌の会、和歌会が開かれたわけですが、そこでいろんな人が和歌を詠んだわけですが、その中で、一番メインといいますか、その当時の天皇である後土御門天皇が自ら詠んだ和歌三首を自身で書き留めたものということになります。

学科のほうで購入したものであります、何せ大変傷んでいたということで、平成24年に実は修理をいたしました。

2人の大学院生が、ばらばらにして、裏側の補強紙ですね、裏打ち紙といいますが、それを取り替える。実はこれが結構大変な作業で、本紙と当然のことながらぴったりとくっついているわけですね。それを、慎重に裏の補強紙をはがしていくところから始めるわけです。それを新しいものに取り替える。

それから、虫が食って欠けている部分も結構ありましたので、そこには補紙をあてがう。そして、最終的には、表具はもともとのもの、元使いといいまして、きれいにして元のものを使う。

それからプラスして、新たに、こういうふうに、もともとの軸は大変細いのですが、これを補強するために太い巻軸をつける。それから、ご覧いただけますように、新しい紐も作ったということであります。

以上、活用した例を今お話しいたしました。

○高橋 安達先生、ありがとうございました。

大東文化大学の主に日本書跡の概要と、その活用の一端について紹介していただきました。これに対して、台灣藝術大學のほうからご意見をいただけたと伺っております。

○林進忠 台灣藝術大學の林進忠でございます。どうぞよろしくお願ひします。

「大東文化大学所蔵の日本・中国の古典書跡に見る歴史的価値について」、確かに、たくさん貴重な拓本などが所蔵されています。

この「史牆盤」は1976年12月に出土しました。文字数は284字あります。西周中期の恭王時代の重要な器です。その内容は7代の天子についてです。その銘文は西周中期のもので、典型的な書道スタイルと言えるでしょう。

これは「虢叔旅鐘」の拓本です。西周晚期の厲王時代のもので、文字数は91字あります。拓本は清代の阮元の旧蔵品です。その本物は北京の故宮に所蔵されています。これはもともと、八個の編鐘の一つです。そのほか、写真の左側ですが、これは東京書道博物館（※正式名称：台東区立書道博物館）所蔵のもので、銘文は比較的短いです。銘文中の人物関係から見て、「散氏盤」と年代的に近いものです。この二点から、地域、身分の差異によって、書道スタイルに違いが生れることが良く分かります。

これは「秦公鎚鐘」です。年代は春秋時代です。まだ撮影されていません。1978年に8件同時に発見され、これは、その中で最も整っているものです。鎚鐘には135字あります。東周春秋時代の秦武王の時代のものです。

この図版にあるのは、恐らく漢代のものではありません。1974年に河北省平山で発見された「公乘得守丘刻石」と呼ばれるものです。二行で19字あります。刀で非常に自然に彫られています。非常に貴重なもので、非常に高い水準の石刻刀筆書道の作品です。

この漢の銅器ですが、形式から、「日光四乳草葉紋鏡」と分かります。「見日之光、天下大陽」と八字、書かれています。銘文のある銅鏡では比較的早期のもので、前漢中期の武帝時代のものです。

この銅器は「日光昭明重圈鏡」です。内側に一つの円があり、外側にも一つの円があり、二重の円の銘文です。年代はおおよそ、前漢の晚期です。

図版は「宇治橋断碑」であり、大化二年のもので、現在のところ、日本最古の刻石です。筆法は非常に古風で素朴であり、堂々としていて、「張猛龍碑」と比肩できます。

これは、先ほど、安達先生のお話しにあった「多胡碑」です。この碑は朝鮮経由で、清朝

時期の中国にもたらされました。早い時期に『平安館金石文字』に収録されました。葉東卿の先生である翁方綱は「多胡碑」は「瘞鶴銘」と比肩することができるとしています。趙之謙は『補寰宇訪碑錄』に収録し、相当高く評価しています。さらに扇に模写した作品もあり、下のこの部分に見えます。ありがとうございました。

○高橋 先行公開したおかげで、大変貴重なアドバイスをいただくことができました。

名称の違いであるとか、あるいは、伝来や評価に関することなど、林先生ならではのご見解を今、頂戴することができまして、このデジタル・アーカイブスの成果が一つ積み重なっていくのだなということが分かりました。

Session 2に移ってまいります。

○高木 今ご紹介いただきました高木厚人です。

これから、「大東大所蔵の日本の現代作家の作品に見る芸術的価値」ということで、所蔵作品を随時紹介させていただきます。

いずれも日本書壇を代表する先生方の作品であります。

しかも、学生たちの授業に使うということもありますし、表現の多様性を求めてという作品であります。

まず、この作品は、上條信山先生の作品です。張猛龍碑の持つ独特な造形を作品に取り入れたということでよく知られている作家です。

この作品では、切れのよい線に、にじみ、あるいは、かすれを加え、元の造形から全く異なった印象の作品に仕上げています。

墨をにじみさせることによって、線の深さ、あるいは、その美しさを呼び起こすことに成功しています。

我々は、この作品を見て、作品の周りの書いていない部分、余白を美しく感じます。

この作品は、宇野雪村先生の作品です。

宇野雪村先生は、戦後、現代書の運動、あるいは、前衛書道の運動、あるいは、墨書にも関わって活動していました。

この作品は、へんとつくりを極端に離すことで、書面に広がりと、新しい秩序を成立させています。

書ですから、文字を書いているのですが、これだけへんとつくりを離すと、一瞬、文字に

は見えません。

しかし、よく見ると、それが文字であることが分かります。

現代書の運動ということは、書を単なる文字、記号化して書くのではなく、絵画的な造形芸術として高めようとする運動です。

この作品は、そのような運動の中で生まれてきています。

この作品は、青山杉雨先生の作品です。

青山杉雨先生は、大東文化大学の書に大きな足跡を残された先生です。

青山先生は、篆書、隸書を土台とした独自の書風を確立しました。

古代の文字を毛筆の一色を通して、現在の感覚によりみがえらせたところが、青山先生の独特の世界であります。

この作品を見る、線の割れ、あるいは、かすれ、それが厳しさを感じさせる作品となっています。

この作品は、今井凌雪先生の作品です。

今井先生は、書体として、篆書、隸書、楷書、行書、草書、漢字仮名交じり、篆刻等々、様々な分野の作品を発表しておられました。今まで見てきた作品はどれもそうですが、それぞれの先生方の線の質が、見る者にとって一つの感情を与えるというように思います。

この作品を見ますと我々は、素朴な表情、また、豊かな線、あるいは、ゆがんだ造形に宿るほつとした、あるいは、芸術性を感じます。

この作品は、野口白汀先生の書です。

野口白汀先生の得意であったところの作品は、少字数の作品です。

この作品も、異様なといえるほどのエネルギーに満ちています。

この墨の塊に、我々はエネルギー、存在感を感じます。

また、素朴さ、温かさを感じます。

この作品は、新井光風先生の作品です。

殷周時代の金文や、戦国春秋時代の古代文字を素材にした作品を多く発表しています。

この作品も、古代文字を出発点として書かれた作品です。

黒と白とのせめぎ合いにより、書面に張りつめた緊張感を表現しています。

我々は、この作品を見ると、書かれていない部分の白い部分が非常に美しく感じます。

では、次に、仮名の作品を紹介していきたいと思います。

今回、仮名の作品は、半折作品、「大東書道」という競書雑誌に掲載された手本としての

作品を紹介しておきます。

仮名は、文字としては漢字の草書体から崩れて生まれてきたものですが、多くの場合、和歌を書くのに使われています。

これから紹介する仮名の作品は、全て和歌が書かれています。

半折に全て2行で書かれています。

その2行の中で、どこで墨をつけるかというのが一つの問題になっています。

別の言葉で言うと、潤筆、渴筆、墨のあるところとないところ、それをどう表現するかということが問題となってきます。

これは、森田竹華先生の作品です。

仮名文字 자체は単純な形を使いながら、動きを控え、線の味わいで見せた作品です。

この作品は、杉岡華邨先生の作品です。

同じく、半折に和歌を2行で書いています。

一文字一文字は崩さず、文字の組み合わせで作品の調和を目指しています。

この作品は、榎倉香邨先生の作品です。

この作品も2行で和歌を書いています。

単純な文字をたくさん使い、文字と文字とをつなげる連綿の美しさを際立てた作品です。

かすれはありませんが、1行目の墨に対し、2行目は細い線で明るさを出しています。

これは、高木聖鶴先生の作品です。

単純な文字、複雑な文字を選びながら、文字を積み重ねていくことで、景色の変化を作っています。

2行目の半ば以降の墨の強さが、一つのポイントとなっています。

これは、小山やすこ先生の作品です。

仮名作品というと文字をつなげることが多いのですが、この作品は、つなげず離し書きで書いているところが多く見られます。

読みやすくするために、漢字、平仮名をたくさん用いています。

この作品も、上部、上のほうを見ると、1行目の墨のあるところに対し、2行目はかすれで明るくしています。

この作品は、井茂圭洞先生の作品です。

かすれて書き出して、しばらくして墨を入れて山場を作っています。

その後、離し書きの景色を作り、下のほうでは連綿の書き方をしています。

2行目は簡単な文字で行の流れを作り、半ばで墨をつけて引き締めています。

今、紹介させていただいたのは、和歌を半折に2行で書く作品ばかりでしたが、それぞれ皆、違った方法論で作品を成立させています。

このようなことを学生たちに紹介することで、様々な書き方を学生たちは学ぶことになります。

以上で仮名条幅作品に見る多様性ということで、仮名のほうの紹介を終わらせていただこうと思います。

○高橋 大東文化大学は大変多くの書家を輩出している大学として知られています。それに呼応するように、現在見ていただいたような現代作家の作品というのをたくさん所蔵しているのも特徴の一つかと思います。

これに関連しながら、台灣藝大のほうから蔡介騰先生にお話をいただきたいと思います。

○蔡介騰 こちらからは書道について、我々の学部の現状について紹介します。

書画芸術学部は2002年に開設しました。この学部は1962年創設の台湾芸術専科学校美術部を受け継いだものです。水墨画、書道、篆刻の三つの分野があります。現在、学生数449名です。学部には三部門があります。全日制には修士、在職修士、博士があります。これらが学生の大まかな現状です。

安達先生と高木先生の報告でありました大東文化大学の書道学科が所蔵している作品ですが、とても羨ましいです。

我々が使用する教材は、現在のところ故宮博物院の複製品の書画を使用しています。現在、83件あります。その他に、書画学部は1600件所蔵し、論文は1200本あります。原本について、これが、我々が羨むところですが、当校が所有する原本は、「有章博物館」で所蔵され、それらの作品のデジタル化も、現在制作が行われています。これらは我々の学部にはないです。

しかし、教育分野での関連資料は多数あり、出版物については、『書画芸術学刊』、『大觀印林』や、定期的に開催されるシンポジウムの論文集などがあります。これらの一部はネットで見ることができます。

画面は、2018年に行われた「漢字の書道の現代の趨勢シンポジウム」のものです。我々の先達である前主任の李奇茂先生および学部設置時の元老とも言える先生方の一人であ

る傅狷夫先生についての研究もあります。

これらの資料は全て我々の学部のサイトに載せてあり、関係資料を全て見ることができます。これによって当校の学生は自分の研究を深めることができ、研究を行っている学外の人々も閲覧することができます。

学生たちの表現も多くの変化があります。

伝統的な技術の上に、個性的な表現を行い、さらには筆と墨を柔軟に活用しています。

個性的であり、自分のスタイルを持っています。

この大学院生、博士課程の学生ですが、作品には風格があり、独自性も非常にあります。大陸からの留学生の博士課程の学生です。

碑文の拓本と結合させた作品です。

台湾芸術大学の書画芸術学部では、学生たちが新しい概念を使って、多様な試みを行われています。その例を挙げると、今、ご覧になっている作品のように、文字を組み合わせ、言葉の中にある感情を表現したもの、文字のラインの変化を表現形式として使っています。

以上が、当校と当学部の書道教育の一部現状と、学生たちの創作の成果の一部です。ここにいる皆様と分かち合いたいと思います。ありがとうございました。

○高橋 蔡先生、ありがとうございました。

学術的な研究と実作とが大変豊かに融合していて、また、学生、先生方の多様な成果が紹介されているということがよく分かりました。我々大東文化大学も大変いい刺激を受けることができました。

それでは、最後のSession に入ってまいりたいと思います。

これまでのお話を受けて、「書跡のデジタル・アーカイブス化の役割」について、討論をしていただきたいと思います。

○河内 この書跡デジタル・アーカイブス化を進めていく、それも一大学が、私立大学であります、一大学がこういう書跡のデジタル・アーカイブス化をしていく役割について、私はこのように考えているということをお話したいと思います。

現代社会は、I o T社会、インターネットのシーン、あらゆるものがインターネットにつながる時代に向かっています。日本、台湾を問わず、世界じゅうのあらゆるものが既にインターネットでつながっている社会ですね。

今回の、現在もなかなか終息が見えませんコロナウイルスの影響で、そのつながるスピードが猛烈に加速したように思います。

そのような世界的な流れの中で、大学は今、存在意義、存在価値が問われていると思います。

このたびの書跡デジタル・アーカイブス化によって、大東文化大学が所有する知的資源、世の中でいうところのリソースですが、この知的資源、リソースの一端を可視化、目に見える形にしたと思います。

可視化できた以上、これをいかに有効活用していくか、それがこれから問われることになります。

まずは、本学書道学科、大学院書道学専攻の授業の中で、学生、院生にこういったリソースを還元して、知識を習得してもらうとともに、書を見る目を養う指導に生かしていきたいと考えます。

卒業制作、あるいは、卒業論文、修了制作、修士論文、博士論文にも生かすことができると思います。

まずは本学からありますが、本日このシンポジウムを通じて意見を交換させていただいている台湾藝術大學の先生方を通じて、台湾藝大の学生、院生にも、ぜひリソースを使って書を見る目を養う指導に生かせていただければと願うばかりです。

まとめますと、書跡デジタル・アーカイブス化の高等教育機関としての役割は、まずは本学や台湾藝術大學の教育と研究に資する、還元することが最高の役割だと思います。

まずここから出発して、その後、より多くの人に国内外の学生から研究者に向けて、本学のO B、O Gも含みますが、より多くの人に活用していただくことが最終的な役割だと考えております。

○安達 私のほうからは、このデジタル・アーカイブスについて、学術的な面から我々が意識したこと、意図したことについて若干お話ししたいと思います。

まず第1点は、今、大学のデジタル・アーカイブスっていろんなところでやっておりまして、インターネットでよく見ることができます。

ですが、拓本とか、あるいは、古文書のデジタル・アーカイブというのはあるのですが、それらを含めた書跡のデジタル・アーカイブスというのは、ほかにはないのではないかということを意識してやっております。

それから、第2点目ですが、普通こういうものでありますと、本紙、本体の画像だけということが多いのですが。

今回実は、先ほども画像で出てまいりましたが、本紙の周りの表具を含めた全体の画像とか、あるいは、付属品もかなり網羅したつもりです。

それによって、表具の研究だとか、あるいは、作品の伝来の研究とか、これにぜひ役立てていただきたいという思いがあります。

とはいって、内容等が不十分だということは十分承知の上、今回紹介しているわけあります。

先ほど間違いを指摘していただき、あるいは、追加すべきことも教えていただきました。今後とも、いろんな方面からまたご指摘いただきながら、よりよいものを作つていければというふうに考えています。

○高木 今回のデジタル・アーカイブス化ということで、我々、私自身、大東におりながら、大東に所蔵しているものについて、なかなかふだんは実際に見ることができないという状況だったのですが、アーカイブス化されることによって、非常に身近なものとして実際見ることができるというのは、非常にありがたいことだと思います。

それは学生たちにとっても同様なことで、広がれば世界じゅうの人も見てもらえるということが第1点。

それから、作品制作のことに関連して言えば、今日紹介させていただいた中で、仮名の作品ということは全部2行書きのものを紹介させていただいたのですが、競書雑誌に掲載したということで、漢字のほうの現代作家の作品もたくさん収蔵しております。

そういうもの、作品作りというと、漢字も仮名も2行書きがその出発点というようによく言われるのですが、その辺、同じ条件の資料をたやすく見ることができることで、作品を制作する立場の人たちにも大いに役立つものと思って期待しております。

○高橋 ありがとうございました。台湾側からお話をあつたらお願ひいたします。

○李郁周

この度、大東文化大学の資料のデジタル化に関するシンポジウムに参加でき、とても勉強になりました。

2014年に大東文化大学を見学した時、書道学科、書道研究所の多数の所蔵品を見ました。古書ばかりではなく、書道作品、印刷物など、非常に多くの所蔵品があり、大変驚きました。

この度、大東文化大学の主要な所蔵品のデジタル化は、特に書道のものに関して、非常に有益なものだと思います。

河内教授の指導の下、デジタル化事業は、政府からの資金があり、非常に得難いことだと思います。

台湾芸術大学にも、多くの所蔵品がありますが、まだデジタル化の計画がありません。

大東文化大学のやり方は、我々台湾芸術大学にとっては、とても刺激になりました。

先達の書家、画家、篆刻家の作品を、デジタル化によってインターネット上の多くの人々が使用することができることは、非常に理想的なことだと思います。

今回のシンポジウムで、我々台芸大は積極的に学び、行動し、政府にデジタル化事業の経費を申請できるか試すべきだと思います。

この事業は大変複雑で、しっかりとやろうとすれば、いろいろな面をすべて配慮する必要があり、非常に難しいです。

ですので、大東文化大学の今回のデジタル化に対して、我々は深く敬服しています。

○高橋 今、李郁周先生からご指導いただきましたように、まだまだこのデジタル・アーカイブス化の作業では、続けていかなければいけない面があるかと思います。台湾藝大の先生方、また、世界じゅう広く、いろいろな先生方にご指摘をいただきながら、このコレクションというのを最大限活用できるようにしてまいりたいと思います。

しかしながら、こうしたアーカイブスを構築することによって、あらゆるものを可視化すること、この重要性に気づくことができました。

1つは、細部を詳しく見ることができるようになる、この重要性です。

これは作品制作や、詳しい研究に、大変役立つのではないかと思います。

もう1つは、安達先生の報告にあったように、箱の中に収めてあるもの、あるいは、作品の裏側といったような、ふだんは見ることができないところを見ることができること。

さらに、距離を超えて物を見ることができるということ。こうして東京と台湾と離れていても、詳しく物を見る能够性があることも意義があると思います。

また、日本は災害の多い国でもあります。こうしたデジタル化をすることによって、作品

が将来に多様な保存形式で伝えられていくのではないかと思います。

これでこのシンポジウムを終了してまいりたいと思いますが、台灣藝大の皆様も、我々も、このデータを活用してまいりたいと思います。

本日はご参加いただきまして、まことにありがとうございました。

○蔡介騰 今回のシンポジウムと、大東文化大学のデジタル・アーカイブスについて、我々は大変すばらしいものだと思い、感心しております。このサイトの設立によって、時間や空間の制限を超えて、閲覧することができます。ですので、今後の交流の一つとして、このサイトを本校や私たちの学部のホームページにリンクさせていただければと思います。そうすると、こちらの教員や学生、台灣の研究者が資料を調べやすくなり、研究がより進むと思います。

○河内 ぜひ一緒にやっていきましょう。

○蔡介騰 ありがとうございました。

○林錦濤 大東文化大学側の通訳の方に、感謝を申し上げます。今回は多大な収穫を得ました。今後もこのような機会があることを期待しております。

○高橋 こちらもよろしくお願ひします。

○林錦濤 ありがとうございました。

○高橋 以上をもちまして、本日のシンポジウムを終了したいと思います。参加の皆さんありがとうございました。